

● 河野 航・ピアノ

5歳よりピアノを始めた(らしい)。飽きっぽい性格が災いし、引越しや進学のためにピアノの勉強が中断され、おまけに中学校では吹奏楽部でチューバ、大学ではオーケストラに入ってヴィオラに浮気をする始末。ただし、チューバやヴィオラを勉強したおかげで、ピアノを弾くのにあたって左手や中声を聴けるようになったという点もあるので、悪かったことばかりではないと都合よく解釈している。新交響楽団にヴィオラで入団した直後の演奏会で、伊福部先生の『シンフォニア・タブカーラ』に出会い、氏の作品に魅せられる。現在所属しているオーケストラ・ニッポニカでソリストとして出会い、その後弟子入りした現在の師匠の門下では、大学生の中に一人オジサンとして混ざり、多少場違いな感じを受けながらレッスンを続けている。ピアノを鈴木和代、坪井圭子、近藤信子、柴沼尚子、大島正泰、福本俊之、三輪郁の各氏に師事。

● 加藤 のぞみ・ヴァイオリン

3歳よりチェロに転向した従兄弟の代わりにヴァイオリンを始める。師の教えに従い『言葉を覚えるように』ヴァイオリンを『身につける』。但し、『読み書き』を全く学ばなかったため、未だに楽譜が読めない。初めての邦人作品との出会いは、10歳のときの宮城道雄『春の海』。尺八の様な音を出すのだから、音の最初からヴィブラートをかけない、と教えられ、ノンヴィブラートの美しさを知る。新交響楽団に入団して『伊福部個展』で、ブラームスやマーラーとは全く違う交響楽の世界が在る事に衝撃を受ける。オーケストラ・ニッポニカで活動する中で、日本人作曲家にも多くの魅力的な室内楽曲があることを知り、紹介したいとこの企画に取り組む。ヴァイオリンを故広瀬八朗、藤家桜子の各氏に、室内楽を原田幸一郎氏に師事。今回の演奏に際しては、小倉朗氏に作品を委嘱された小林武史先生、ニッポニカの邦人作品演奏でも大変にお世話になっている高木和弘先生に、沢山のアドバイスを頂きました。

● 由谷 一幾・打楽器【賛助出演】

音楽に興味を持つきっかけとなったのはゴジラとドラゴンクエストと昔懐かしいスーパーファミコンのマリオペイント。そして小5の時にストラヴィンスキーの「春の祭典」と運命的な出会いを果たし、すっかり音楽にのめりこんでしまった。中学の吹奏楽部で打楽器、高校では人数制限のため打楽器からはじき出されトロンボーンを担当し、大学の交響楽団で打楽器に復帰。オケ生活4年間の集大成としての1ヶ月に渡るヨーロッパ公演、最終公演地パリのシャンゼリゼ劇場でハルサイのティンパニを叩いた事は一生忘れられない。大学オケ卒団後は縁あってオーケストラ・ニッポニカへ。初の打楽器奏者だからと意気込み先月オークションで「ジャンク品」として買った旧ニッコン手締めティンパニの音が余りに魅力的で、最近はシンプルである事の素晴らしさが一大テーマとなっている。ティンパニ・打楽器を久保昌一氏に師事。

探楽愉快 Vol.2

作曲家・さまざまな出会い

2008年 8月30日(土)

15:00開演 14:30開場

スタインウェイ・サロン東京

松尾ホール



本日は、お忙しい中を、私共の演奏会にお越し下さり、ありがとうございました。

普段はオーケストラ・ニッポニカという団体で、主に日本人作曲家の作品の蘇演や発掘初演を柱の一つとした活動に力を注いでいる私共は、邦人作品に出会った経緯はそれぞれ異なりますが、故伊福部昭先生の作品との出会いがきっかけという共通項がありました。その伊福部先生への感謝の気持ちを込めた演奏会を、世田谷の小さなホールで催したのが昨年2月。伊福部先生が亡くなられて丁度一年後に、そのような機会を実現できたことは、私共にとっても感慨深いものでした。

それから一年半。今回は私共がオーケストラ活動の中で出会った作曲家の室内楽作品をご紹介します。それぞれの曲は、例えば橋本が洋を越え時を越えモーツァルトと向き合い、深井は草野心平に触発され、小倉は小林武史から、吉松は片手を失った舘野泉から委嘱を受け、武満徹は瀧口修造に出会う——生き活きとしたひととひととの出会いの中で作品が出来上がっていったのではないかと考えが広がり、音符と格闘するストイックな姿とはちがった作曲家のイメージに魅力を感じました。

音の楽しみを探することは愉快なり——これは、さまざまな発見に満ちた発掘作業に取り組む上で、私共が心から感じることです。もちろんこれは日本人作曲家の作品に限らず、まだまだ知らない音楽の森が広がっています。その森に埋もれた宝物を探して歩く楽しさを、少しでも皆様と共に味わうことが出来れば、これ以上の喜びはありません。

P R O G R A M M E

橋本 國彦：モザート風のロンディノ 作品2-2 (1927)

Kunihiko HASHIMOTO : Rondino alla Mozart op.2, no.2

深井 史郎：蛙 ヴァイオリンとピアノのための幻想曲 (1953)

Shiro FUKAI : "KAERU" Fantaisie pour violon et piano

1. るるる葬送 Rururu Soso

2. 祈りの歌 Inori no Uta

—草野心平『蛙』の詩による—

- Scenes from "FROGS" by Shimpei Kusano -

小倉 朗：ヴァイオリンとピアノのためのソナチネ (1960)

Roh OGURA : Sonatina

第1楽章 Allegro

第2楽章 Lento

第3楽章 Allegretto

吉松 隆：タピオラ幻影～ピアノ(左手)のために～ 作品92 (2004)

Takashi YOSHIMATSU : Tapiola Visions for piano (left hand) op.92

第1曲 光のヴィネット Vignette in Twilight

第2曲 森のジグ Gigue of Forest

第3曲 水のパヴァーヌ Pavane for Water

第4曲 鳥たちのコンマ Commas of Birds

第5曲 風のトッカータ Toccata in the Wind

吉松 隆：プレイアデス舞曲集 IIa Op.28a (1987)*

ヴァイオリンまたはフルートのオブリガートを伴うヴァージョン

Takashi YOSHIMATSU : Pleiades Dances IIa Op.28a

a version with an obligato part of violin or flute

第1曲 消極的な前奏曲 Negative Prelude

第2曲 図式的なインヴェンション Conventional Invention

第3曲 線形のロマンス Alignment Romance

第4曲 鳥のいる間奏曲 Interlude with Birds

第5曲 断片的な舞曲 Fragmentary Dance

第6曲 小さな乾いたフーガ Dry Little Fuga

第7曲 積極的なロンド Positive Rondo

武満 徹：遮られない休息 (1952~1959)

Toru TAKEMITSU : Pause ininterrompue pour piano

第1曲 ゆっくりと、悲しくそして対話を交わすかのように

Slowly, sadly and as if to converse with

第2曲 静かに、残酷な響きで Quietly and with a cruel reverberation

第3曲 愛の歌 A song of love

—瀧口修造の詩による—

- D'après un poème de Shuzo Takiguchi -

武満 徹：妖精の距離 (1951)

Toru TAKEMITSU : Distance de Fée for violin and piano

河野 航・ピアノ Piano・Wataru KONO

加藤 のぞみ・ヴァイオリン Violin・Nozomi KATO

由谷 一幾・打楽器 Percussion・Kazuki YUTANI*【賛助出演】

「作曲家・さまざまな出会い」によせて

林 淑 姫

日本近代音楽館

加藤のぞみさんと河野航さんはオーケストラ・ニッポニカのコンサート・マスターとヴィオラの首席奏者である。加えて河野さんはピアノの名手でもある。ニッポニカを中心メンバーとして、日本の作曲史に光をあて、従来の日本人作品に対する無視、無関心を根底からひっくり返す画期的な活動を支えている。日本の作品、それも戦前の作品をとりあげるといふようなことをプロのオーケストラは減多にしない。採算に合わないということもあるが、それ以前に、音楽家たちが作品を知らないということもある。

ゆたかな教養と見識を備えたアマチュアの演奏家たちが埋もれていた楽譜の頁を開き、コンサートを作る。モーツァルトやドビュッシーの楽譜に覆われて見えなくなっているけれど、異なる時代と異なる風景のなかで営まれるすぐれた創作もある。全部とはいわないが幾度も繰り返し聴きたい作品もある。知らないことはつまらないことである、という単純な命題をニッポニカは私たちに教える。

加藤さんと河野さんはニッポニカのほかの団員と同じように、職業人としてほかに仕事をもちながら演奏活動をしている。週日の仕事と週末の音楽を持続的に両立させることは容易でないと思う。それをのりこえさせるものは音楽を純粋に愛する心。生活人としての感性と知性がその音楽に陰影を与える。オーケストラ曲ばかりでなく、アンサンブルやソロの作品にも手をのばして日本の音楽の多様な魅力を伝えてくれる。

本日演奏される作品の年代は1920年代後半から2000年代に及び。お二人の選んだ作品は必ずしも大曲とはいえないが、そうであるがゆえに却って、それぞれの作曲家たちのこだわり、創作の核心を語るものばかり。選曲の妙に感心する。演奏が楽しみである。

作曲家橋本國彦（1904－1949）は、昭和初年代には将来を嘱望される新進ヴァイオリニストでもあった。東京音楽学校で安藤幸に師事し、卒業後ブゾーニ門下のレオ・シロタらと組んでリサイタルを数回開いている。ヴァイオリンを専攻する一方で早くから作曲にも才能を発揮し、1928年フランス風エスプリの利いた歌曲「お菓子と娘」を発表、続いて朗誦の手法を用いたモダニスティックな歌曲「斑猫」「黴」「舞」などで、山田耕筈とは異なる日本歌曲の行くべき道を示し、同時代の若き作曲家たちの圧倒的な共感を得た。東京音楽学校教官という立場によって戦中戦後苦しい創作活動を強いられた作曲家でもある。ヴァイオリンとピアノのための「モザート風のロンディノ」は「お菓子と娘」の1年前、東音卒業の年に作曲。タイトル通りモーツァルト風の古典的な語法で書かれているが、ヴァイオリンとピアノの掛け合いに橋本國彦らしい響きがある。作品番号2には3曲あり、本曲は「即興曲」「モザートの子守唄」の間に位置する。26年に来日したモグリフスキーに献呈。共益商社書店から楽譜が刊行されている。

戦前戦後の日本の作曲界を代表する深井史郎（1907－1959）は橋本國彦と同世代で、橋本のモダンな朗誦風歌曲に心を奪われた作曲家のひとりでもある。管弦楽曲「パロディ的な四楽章」「ジャワの唄声」、戦後のカンタータ「平和への祈り」で日本の音楽史に大きな足跡を刻す。1953年に書かれた草野心平の一連の詩「蛙」による二つのヴァイオリン曲は、いずれも死者をおくる詩にもとづいている。「るるる葬送」の美しくも哀切な旋律と、「祈りの歌」の無調の響きが放つ慟哭の歌。敗戦後8年、作曲家は戦争の傷を抱えたまま書く。戦時下の作品に通底する憂愁の響きは戦後の憤りと自責を生む。敗戦直後の無力感と無力だったことへの痛恨の思いは、死者への祈りを通して、戦後を生きること存在論的問いかけへとつながる。「祈りの歌」は15年前に一度バリトンのための朗読をとまなう歌曲として作られているが、ヴァイオリン曲はまったく新たに作曲された。ジュリアード音楽院に学んだ大村多喜子のリサイタルで初演。その後「るるる葬送」

が遺稿のなかから発見され全2曲として演奏されたのは1966年、松本善三と田辺徳子による「ヴァイオリン・ソナタの夕」においてであった。作曲家の構想では「蛙」によるヴァイオリン曲を19曲作るつもりだったらしく、頁の失われた草稿1篇といくつかのスケッチが残されている。楽譜未出版。

深井史郎の若き友人だった小倉朗（1916－1990）もまた、勉強家で批判精神の旺盛な作曲家だ。1930年代後半に始まる創作活動のなかで、当初はフランス近代の音楽に傾倒、のちバルトーク、シェーンベルクをも吸収しつつ、日本の音楽風土、「伝統」音楽への論理的な省察を通して内なるものの再生を図る。「ヴァイオリンとピアノのためのソナチネ」は1960年、小林武史のチェコ演奏旅行の際に委嘱され作曲された。日本民謡による合唱曲を次々に発表していた時期と重なっており、「ソナチネ」も全曲にわたって民謡に素材がとられている。第1楽章（Allegro）の最初の主題と中間部の主題は同じ曲の三味線と唄から別々に採り対照させるといふ独自の構成をとり、第2楽章（Lento）「南部牛追い唄」のゆったりとした歩みをはさんで、第3楽章（Allegretto）最初の主題は「チャガング」という祝い唄に拠る。副主題にわらべうたを配し、コーダは祭りの笛。小倉朗らしいダイナミックなリズムと独得な和声感が耳を奪う構成的な作品。楽譜は音楽の友社刊『日本のヴァイオリン・ソナタⅡ』所収。

1981年「朱鷺によせる哀歌」で颯爽とデビューした吉松隆（1953－）は、いわゆる「現代音楽」の主流とは別位置に立って音楽を作ってきた。現代音楽の「非音楽性」に抵抗し、調性やメロディの復活を旗印に掲げた「新世紀末抒情主義」や「現代音楽撲滅運動」に共感を覚える音楽ファンは多い筈で、俗に流れず（俗とはなにか、と作曲家から反論が立てられそうだが）、凜とした佇まいを見せる作品群は若い世代を中心に根強い支持を得ている。鳥や天体をタイトルにした作品が多いが「ブレイアデス舞曲集」（全7集）もそのひとつ。ブレイアデス星団は和名「すばる」。ギリシャ神話では美しい7姉妹に擬えられる。「ブレイアデスの7つの星、虹の7つの色、いろいろな旋法の7つの音、3拍子から9拍子までの7つのリズムを素材にした『現代ピアノのための新しい形をした前奏曲集』への試み」とは作曲家自身の弁である。12音列から音楽を取り戻すという挑戦的な言辞とはうらはらに、吉松隆のピアノ曲がもつ音色の透明さ、柔らかな抒情性は、ヴァイオリンに彩られることによっていっそう際立つ。本日の演奏には、楽譜に記された作曲者のアドヴァイスにしたがって小さな打楽器が即興的に加わるという。変拍子のリズムにのって楽しいものになるだろう。左手のためのピアノ曲「タピオラ幻影」は館野泉をして「吉松隆のピアノ曲の一大ブレイク」と言わしめた作品。脳溢血で右手が不自由になったピアニストのために書かれた。シベリウスに共鳴して作曲家を志したという吉松隆の音楽の原風景を見せてくれる。「タピオラ」とはフィンランドの神話にある神の森。楽譜は前者が東亜音楽出版社、後者は音楽の友社刊。

武満徹（1930－1996）の二つの作品はいずれも彼が生涯にわたって精神的な師と仰いだ詩人瀧口修造の詩による。二人の出会いは1950年、武満20歳、詩人47歳のとき。翌年瀧口命名による芸術家グループ「実験工房」が結成された。瀧口修造は戦前からシュールレアリズム詩人として、また美術評論の分野でも活動した異色の前衛芸術家である。その彼の詩画集「妖精の距離」（阿部展也画。1937刊）の二つの詩篇が武満徹をとらえた。先に、詩による、と書いたが、ヴァイオリンとピアノのための「妖精の距離」（1951）とピアノ曲「遮られない休息」第1曲（1952）は、文字通り、詩行に寄り添うようにして作曲されている。だからこの二つの作品は瀧口の詩に藉りた武満の音楽による詩でもある。第1曲は冒頭の主題が最後に再び戻ってくる円環の形をとる。7年後に第2曲と第3曲を加えて組曲とした「遮られない休息」全曲は、第1曲を中心円として彫物線状の弧を描く。詩と併せて聴いてみて欲しい。若き武満徹の感性を、その魂のつばやきを私たちはよく聴きとることだろう。楽譜は日本ショット刊。

瀧口修造（『瀧口修造の詩的実験1927～1937』思潮社刊より）

遮られない休息

妖精の距離

跡絶えない翅の

幼い蛾は夜の巨大な瓶の重さに堪えている

かりそめの白い胸像は雪の記憶に凍えている

風たちは痩せた小枝にとまって貧しい光に慣れている

すべて

ことりともしない丘上の球形の鏡

うつくしい歯は樹がぐれに歌った
形のいい耳は雲間にあった
玉虫色の爪は水にまじった
脱ぎすてた小石
すべてが足跡のように
そよ風さえ
傾いた椅子の中に失われた
麦畑の中の扉の発狂
空気のラピリンス
そこには一枚のカードもない
そこには一つのコップもない
欲望の楽器のように
ひとすじの奇妙な線で貫かれていた
それは辛うじて小鳥の表情に似ていた
それは死の浮標のように
春の風に棲まるだろう
それは辛うじて小鳥の均衡に似ていた

草野心平『蛙』（草野心平『定本 蛙』日本図書センター刊より）

ささるる葬送

Accompanied by Chopin's Funeral march.

祈りの歌

しづかにすすむ一列の。
ながい無言の一列の。
蛙の列がすすんでゆく。
ひたひに青い蛍をともし。
万の蛙等すすんでゆく。
日本砂漠の砂をふみ。
砂漠のくらい闇をふみ。
しづかにしづかにすすんでゆく。

るるるはしろい。
ほのほになつて。
るるるはるなご。
うつくしいるるはもうゐない。
ひかるはなびら。
るるるにこそげ。
ひかるはなびら。
るるるにこそげ。

ひとすぢのさぎなみたててみおくりの。
歌がしづかに流れたす。
日本砂漠の闇のなか。
いつとはなしにその歌も。
はるかかなたにとほのいて。
蛍のあはれ。
ひも絶え絶えにきえてゆく。
かたむく天に。
鉤の月。

りをりをりま りま
はりま はりま よう
いいむ いいむ
おお いいむ いいむ
はりま はりま よう

ありかまだ あんなに
るり 星
しるびやんけ 死ぬいや
しるびやんけ 死ぬいや

りをりをりま りま
はりま はりま よう
いいむ いいむ
おお いいむ いいむ
はりま はりま よう